

◇ 12月の天文暦 ◇

日時	記	事
6 6	上弦	
7 22	大雪 (太陽黄経 255°)	
11 8	水星 東方最大離角	
13 6	望	
16 23	金星 最大光度	
19 11	水星 留	
21 6	下弦	
22 16	冬至 (太陽黄経 270°)	
28 20	朔	
23	水星 内合	

188 センチ反射望遠鏡・岡山

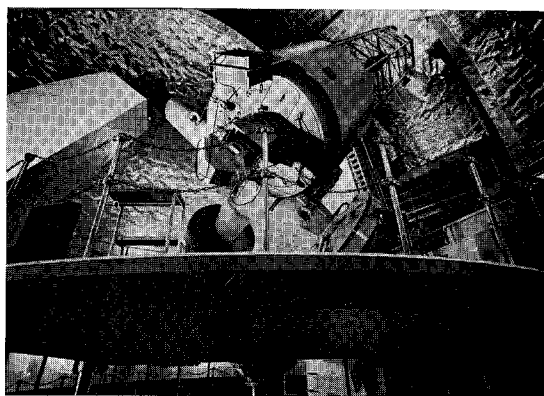
1960年掘付当時、世界で第6位にランクされていたこの器械は、地元では「東洋一の望遠鏡」の名で親しまれている。直径 20 メートルのドームは山陵の上に白銀に輝き山陽本線の車窓からかきまみることできる。

有効口径 188 cm, イギリスのグラブ・パーソンズ製。
 ニュートン焦点 9.150m, 口径比 4.8
 カセグレン焦点 38.855 18
 クーデ焦点 54.290 29

当初の観測装置は、ニュートン焦点での直接写真撮影、カセグレン焦点装着の2台のプリズム分光器、クーデ室内のグレーティング分光器である。正規の観測はあらかじめ調整されたプログラムにより1962年4月に始まる。カセグレン分光器は特に早期型特異星や低温度星の分光型分類に大活躍した。直接写真は 16cm 角のガラス乾板 (約 1° 平方) 上に数多くの星像を記録し、いくつかの小惑星・周期彗星を再発見した。また星団・星雲・galaxies の測光・測色観測も行なわれている。この器械にとって本命ともいべき仕事は、クーデ室内での精密分光分析の研究である。ここでとられた数多くの高分散スペクトルにより、星の本体が解明され、その局部的運動が追究される。

ニュートン焦点には星雲分光器が新造され、8ミリ幅のフィルム面に星雲・galaxies などの微光天体のスペクトルを焼きつけることが可能になった。1966年6月アメリカのカーネギー研究所より貸与された影像倍増管は、クーデ分光器あるいは特別設計のカセグレン分光器に装着され QSS, Seyfert galaxies の研究への戦力となっている。

大望遠鏡でありながら、鴨方についたその夜からこの器械を手軽に駆使できるというのは、日夜整備にはげんでいる「保線区」の諸君の努力に負う所が多い。そして世界中でこの望遠鏡ほど勤勉に (いいかえると休みなく苛酷に) 稼働されている器械は少ないであろう。小さい



(緑川洋一氏撮影)

修理は常のことであるが、極軸内配線の大修理、ドーム扉の滑車、ワイヤロープの取替、etc. と大修理・大改造も数多く、鏡面の再蒸着作業 (メッキ) は年中行事となった。

この 10 年間に、この器械にさわった観測者は 200 人をこえる。持ち時間が少ないとはいえ、不自由な外国とはちがいに「日本語で」望遠鏡が動くというのは大きな利点で、この器械を通して「天体観測」について「目の前のうろこを落した」人も少なくはないであろう。

(石田五郎)

